

最近伝統木造について思うこと

西澤英和

近頃学生を見ていると、伝統木造建築の修復や保存活用への人気が非常に高い。これは京都だけの話かと思っていたが、実は全国的な趨勢らしい。また、モダン建築を扱うデザイン誌よりも、伝統木造を取り上げるデザイン誌の伸びの方が遥かに良いそうだ。

だが、多少とも文化財修理に関わってみると、そのような世間の動きとは裏腹に、伝統木造を取り巻く状況は、最近ますます危機的な状況に陥っていることを実感する。棟梁や左官など伝統技能者の高齢化と後継者不足は日々深刻化し、山林は荒れ、いまや製材もままならない。伝統技術を支える道具や材料生産の技術が途絶えるのも目前である。

日本には現在4400万戸の住宅があるが、戦前からの伝統木造家屋は僅か80万戸に過ぎない。要するに50棟に1棟くらいしか残っていないのだが、京都の町を歩けば、無残に壊された町家を産廃処理場に運ぶトラックの疾走を目にしない日はないはずだ。こうして毎年全国で10万戸が解体されているという。おそらく10年を待たずして、伝統木造建築はその技とともに日本から消滅するのは確実だ。

今、伝統木造への関心が大きな高まりを見せているのに、その思いが現実に反映されていないのはなぜだろう。戦後一貫して自国の伝統文化を蔑ろにしてきた国の姿勢に根本的な問題はあるのは論を待たないが、今ひとつ思うのは、伝統木造に関心を持つ多くの市民や若い人たちと、大工棟梁などの伝統の技能者や林業家などの伝統木造に携わる人たちが果たして直接向き合いながら、率直に交流してきたのだろうか疑問に思う。お互いが狭い業界の中で、ややもすればやせ細ったパイを奪い合い、ばらばらになって先細りの道を転げ落ちてはいないだろうか？皆がこの危機を明確に認識し、日本の伝統文化を守ろうと声を上げているのだろうか？

さて、京都では活用マネージャの活動が始まった。私は、この組織などが中心になってNPOとしてのネットワークを活かし、伝統木造業界の人たちと一般の人たちが、対等で和やかな交流の場—例えば伝統の技の魅力を示すイベントなどを通して、日本人が千年以上をかけて培ってきた伝統木造の危機を訴え、そして日本の木で、日本の風土に根ざした、日本の伝統木造を再構築していく、いわば伝統木造のルネサンス運動を展開してはどうか？そんなことを最近思っている。

以上